

問題・解答 用紙番号	55
---------------	----

の解答用紙に解答しなさい。

国語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
看護学部、農学部(食農ビジネス学科)

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I 次の1～5の傍線部と同じ漢字を含むものを、ア～オのうちからそれぞれ一つ選びなさい。
(一〇点)

1 昔を思い出しカンシヨウにひたる

ア シヨウガイ事件を起こす

イ シヨウサイに説明する

ウ シヨウミ期限を確認する

エ 夏休みの読書をスイシヨウする

オ 彼は流行作家をジシヨウしている

2 部長の職をゴジする

ア 従来の方針をケンジする

イ 結婚式でシエクジを述べる

ウ ジヨウのあるものを食べる

エ トウジのため温泉に滞在する

オ 部屋をきれいにソウジする

3 優れた人材をトウヨウする

ア 国会議員がトウベンする

イ 戸籍のトウホンを取る

ウ 会員としてトウロクする

エ 米の価格がキエウトウする

オ 故人をツイトウする

4 今後のテンボウを述べる

ア 活動のキョテンを移す

イ 故事成語のシエツテンを探す

ウ エイテンする同僚を祝う

エ 領収書をテンブする

オ めざましいシンテンを遂げる

- 5 この問題の解決はヨウイでない
- ア 職員をサイヨウする
- イ ヨクヨウを付けて話す
- ウ ヨウシヨウの頃の思い出を話す
- エ キョヨウの範囲を超えている
- オ 論文のヨウシを述べる

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

二〇世紀の黒人差別撤廃運動は、一人のカリスマ的な指導者が運動の核をなしていたといえるだろう。

けれども^A二一世紀のBLMは、一人の指導者によって組織が運営される形式をとらない。ハッシュタグというネット利用の新しい伝達手段を活用し、BLMの三人の創設者も指導者的立場にあるのではない。^{*}NAAACPのようなイデオロギー的特色を持たず、会員になる必要もなく、まったくの個人として自発的に参加し、それぞれの思いでデモ行進をする。そのような個人主義の立場の尊重が、時代の風潮に合っていたのではないか。

かつて日本でもそのような市民運動を推進した人物がいる。一九六〇年代、ベトナム戦争泥沼化のなかで、「ベトナムに平和を！」と訴えた^{*}平連のデモ形態を推進した小田実である。小田は、党派・労組・組織に関係なく、誰でも気楽に、市民一人ひとりで参加できるデモのありかたを考案した。「エプロンつけた子ども連れのおかあさんも、花屋のおばさんも、八百屋のおっちゃんも」、誰でも意思表示をしたいと思う人は一緒に歩きましょうと促したのである。

BLMが短期間にこれだけの広がりを見せたのは、強烈なカリスマ的指導者に導かれてきた従来の方式になじまぬ世代が、それでも自己の見解を表現したいとき、BLMの場がより適していたからである。個人の尊重とハッシュタグという伝達方法は、今日の若い世代に適している。

私は、「アメリカの黒人」とかき括弧で括り、いわゆるアフリカン・アメリカンの存在を指示してきた。アフリカ大陸のガーナ人やナイジェリア人などとは違って、アメリカ合衆国に住む黒人の血を引く者は、肌の色が薄くても、「一滴の血」の法則によって黒人とみなされてきた。支配者白人による黒人の定義であり、支配者層によって誕生させられた特殊な黒人として、私は、「アメリカの黒人」とかき括弧で括っている。

ここでアメリカ市民の呼称の問題を取り上げておきたい。

奴隷ではない自由黒人をのぞいて、奴隷制度の時代には、その呼称や個人の名称など重要視されなかった。一九世紀の半ばを時代背景にするマーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』の乳母は、マミー（乳母）と呼ばれ固有の名前すらなく、しかも「純血のアフリカ人」と形容されている。かれらの祖国はアフリカだと支配者白人たちは考えていた。

いつばう当時の自由黒人の知識人には、自分たちを「アングロ・アフリカン」と規定する者もいたが、ごく少数だった。^B「アメリカの黒人」の呼称は、ダーキー、ニガーという蔑称を含め、ブラック、カラード、ニグロ、アフロ・アメリカン、アフリカ系アメリカ人、そして現在のアフリカン・アメリカンなどさまざまに変化している。

ハイフンつきアメリカ人とは、イタリアン・アメリカン、アイリッシュ・アメリカン、ユダヤ系

アメリカ人というように、所属する民族集団・宗教集団を示す形容が使われた人びとである。それでもかれら白人の移民は、アメリカ暮らしが長くなれば自然とアメリカ人になっていき、ハイフンが取れていった。ところがアフリカン・アメリカンの「アフリカン」という形容句は、今日に至るまで外されていない。

ノーベル文学賞を受賞したトニ・モリスン（一九三二～二〇一九）は、この違いを以下のように記している。

移民がアメリカ人になるには、祖国の文化風習を捨てることではなく、祖国では意識もしなかった者になること、すなわち自分は「白人」だと意識し、「白人」になること。アメリカの文化・風習を会得することよりも何よりも、白人以外を疎外する能力を養うことである。そうしなければ自分が忘み嫌われる「よそ者」になってしまう。アメリカンネス（アメリカ性）の定義とは、悲しいかないつでも「カラー（肌の色）」のことである（『「他者」の起源』 二〇一九）。

モリスンは、一九三〇年代、中西部に暮らしていた少女時代の教会での思い出を記している（『「他者」の起源』）。日曜日の教会で、アフリカ救済のための献金皿が回ってくる。そのとき「アフリカ」に対して少女はどのように感じたのか。

「アフリカという名前の響きは美しかったが、その連想からくる複雑な感情があった。飢餓に苦しむ中国とは違って、アフリカはわたしたちのもの、そしてかれらのもの。わたしたちと親密にかかわりながら、きわめて遠い『外国の・異質の』ものだ。わたしたちが帰属するところと言われているが、だれも見ださずともなければ、とくに見たいとも思っていない」（『「他者」の起源』）。

モリスンは、「とくに見たいとも思っていない」と強調する。当時の支配的な白人社会は、「アメリカの黒人」の故郷を当然のこととして、「アフリカ」とみなし、アメリカは故郷にはなり得ないという暗黙の了解を強いていたのである。

自分たちの故郷の土地（ホームランド＝アメリカ合衆国）で、故郷（ホーム）にいるといえないこと、「アメリカの黒人」は、自分たちが帰属する場所で流浪者にされている現実がある。このように、「アメリカの黒人」は、^c「不在のプレゼンス」に押し込まれる。それをモリスンは、「アメリカン・アフリカニズム」と表現する。それは白人のアメリカ社会が勝手につくり上げる「アメリカの黒人」の定義であり、そのような「アフリカニスト・プレゼンス」とは、結局のところ「不在のプレゼンス」なのである。それが a あらわれているのは、まさにアメリカ合衆国の基本をなす憲法である。

合衆国憲法第一条第二節③（下院議員の選出基準）「下院議員の数および直接税の徴収額は、この連邦に加入する州に対して、その人口に応じて配分する。各州の人口は、自由人の総数に、その他のすべての者の数の五分の三を加えることにより算出する。ただし、自由人には、一定の

期間役務に服する者を含み、課税されていないインディアンを除くものとする」

「その他のすべての者の数の五分の三」とは何を指示しているのか。合衆国憲法には「奴隷」「奴隷制度」という表現はない。それが初めて記載されるのは、南北戦争後の修正条項においてである。「その他のすべての者」というあいまいな、「不在のプレゼンス」の表現で、奴隷だった「アメリカの黒人」は指示されていた。

モリスンは、評論集『暗闇で戯れて——白さと文学的想像力』（一九九二）で、アメリカ文学史においてほとんど「不在」とされてきた、「アメリカの黒人」の存在を、白人作家、エドガー・アラン・ポウ（一八〇九―四九）の『アーサー・ゴードン・ピムの物語』（一八三七）や、マーク・トウェイン（一八三五―一九一〇）の『ハックルベリー・フィンの冒険』（一八八四）などの作品をあらたな視点で鋭く分析しながら、かれら白人作家たちが、じつは「黒」の存在を強く意識していたことを指摘し強調した。

主人公ハックルベリー・フィンには、アメリカ文学のテーマの一つである「イノセンス（無垢）」という資質が付与されるが、それは逃亡奴隷のジムの存在があるから可能なのだと主張する。

『アーサー・ゴードン・ピムの物語』では、主人公ピムが南極の近海を航海しながら遭遇する奇妙な体験を語る。そこでピムは、「白」の恐怖と「黒」の存在を衝撃的に認識する。島の黒人ヌーヌーの歯は黒く、またヌーヌーは白いものを見ると恐怖に震える。海上に立ち込める白い霧や灰白色の瀑布、巨大な青白い鳥に恐怖を感じながら、うまく切り抜け、アメリカへ無事に戻る。最後に、目前に立ちのぼる死装束に包まれたような人間とも思われぬ巨大な「姿」の肌の色は「雪のように完璧な白」だった、という言葉でピムの体験を結んでいる。黒の恐怖ではなく、白の恐怖が強調される。

白さについては、ハーマン・メルザイル（一八一九―九一）が、『白鯨』（一八五二）第四二章「鯨の白さについて」で論を展開している。

「白は精神的なものの一番意味深い象徴であり、いや、キリスト教の神のヴェールそのものでありながら、同時に、人類にとって一番恐怖すべきものを象徴する強烈な符丁である。（略）白さは本質的に色というより色の欠落」であると述べているが、いっぽうモリスンも次のように分析する。「白さそのものだけでは無言であり、意味を持たず、底が知れず、要領を得ず、凍結し、不鮮明で、幕で覆われ、恐れられ、無意味で、無情である」（『暗闇で戯れて』）。

すなわち色の欠落である「白」は、ほかの色がなければ存在し得ない。白人のアメリカは、「アメリカの黒人」がいなければ存在し得ないのである。憲法に明らかなように、アメリカ社会では公の言説において、必ずや背景に黒人の存在が意識されている。選挙権・公立学校・国会議員・判事の資格を規定するときに、「アメリカの黒人」の存在を意識せずに考案・発効されることはな

い、とモリスンはいう。

そのように人種イデオロギーを主張すると、文学のイデオロギー化だと批判する人びとがいるが、モリスンは、人種イデオロギーを無視するのは、「文学のロボットミイ化」（『暗闇で戯れて』）を招くことになる」と反論する。なぜなら自由の概念は「真空状態に生まれるのではない」（『暗闇で戯れて』）からである。

なぜ「アメリカの黒人」は「不在のプレゼンス」にされるのか。 X。独立宣言で、「すべての人間は平等に作られている」「生命・自由・幸福の追求」とうたわれながら、そこから奴隷は除外された。制度廃止後も同等の市民ではなく、二等市民としてしか扱われない。なぜそのようなことが起こるのか。

世間と教育が人種差別主義者を製造するのである。たしかに生まれながらのレイシスト（人種差別主義者）はいない。生まれたばかりの赤ん坊が人種差別主義者であるはずがない。人種とは結局のところ、人間が生み出している b の「考えかた」なのである。

（荒このみ「「アメリカの黒人」とは」一部改変）

- * BLM…Black Lives Matter の略。「黒人の命は大切」とする黒人差別撤廃運動。
- * NAACP…全米有色人種地位向上委員会。一九〇九年に白人が中心になって設立された。
- * ベ平連…「ベトナムに平和を！市民連合」の略。

問一 空欄 a ・ b に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | |
|---|---------|---|-------|
| a | ア 自明的に | b | ア 後知恵 |
| | イ 顕著に | | イ 片手間 |
| | ウ 不可避的に | | ウ 日和見 |
| | エ 空虚に | | エ 不文律 |

問二 傍線部 A 「二一世紀の BLM」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 二一世紀の BLM では、特定の指導者による運動が行われないように若い参加者が個々に注視している。

イ 二一世紀の BLM は、ネットの発達によりデモに参加する者全員の間で問題を急速に共有することが可能となった。

ウ 二一世紀の BLM では、一九六〇年代に日本で行われた個人を尊重した市民運動の理念が継承されている。

エ 二一世紀の BLM は、カリスマ的指導者が持つイデオロギー性を短期間で排除するためにハッシュタグを活用した。

オ 二一世紀の BLM では、それぞれの立場や思想に応じたデモ活動への参加のしやすさがその広がりにつながっている。

問三 傍線部 B 「アメリカの黒人」の呼称」とあるが、アメリカの黒人について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 奴隷制度の時代のアメリカ人には、自由黒人の知識人であれば「一滴の血」の法則には当てはまらないという共通の認識があった。

イ 一九世紀以降、現在に至るまで「アメリカの黒人」は、自らも「白人」となるためにアメリカネスを定義してきた。

ウ 白人移民は、アメリカの白人から差別を受けないように、黒人をはじめとする白人以外の人をよそ者として扱う能力を身につける必要があった。

エ 自由黒人の知識人は、自らを「白人」だと認識することに妥協したため、「アングロ・アフリカン」になることができた。

オ 一九世紀半ばにアフリカから来た黒人は、宗教的な理由からハイフン付きのアメリカ人になることができず、現在にいたっている。

問四 傍線部C「『不在のプレゼンス』」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。なお、「プレゼンス」とは、「存在、現前」のことである。

- ア 「アメリカの黒人」のプレゼンスは、アメリカ社会に帰属しなければ、「白人」のアメリカ社会から認められない。
- イ 「アメリカの黒人」は、アメリカ社会にプレゼンスが認められるべきであつて、アフリカに帰属すると考えるべきでない。
- ウ ハイフン付きアメリカ人は、アメリカ合衆国生まれでなければ、そこでの生活が長くとも、そのプレゼンスが容認されない。
- エ 「アメリカの黒人」は、アメリカ合衆国生まれでなければ、合衆国憲法上、「アメリカの黒人」としてのプレゼンスが容認されない。
- オ 「アメリカの黒人」は、アメリカに住んでいるのにもかかわらず、アメリカ社会によりそのプレゼンスが認められていない。

問五 傍線部D「評論集『暗闇で戯れて——白さと文学的想像力』」においてモリスンが指摘していることとして最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア エドガー・アラン・ポウはアメリカ社会で「黒」に出会うことなく育った白人が初めて「黒」に接する状況を描こうとした。
- イ ハーマン・メルヴィルは、「白」はそれ自体では意味を持たず恐れの対象となり得ないが、「黒」との出会いにより恐れの対象へと変化するということを描いた。
- ウ 黒人だけでなくさまざまな人種も同時に存在しなければ、白人のアメリカ社会は成立しえない。
- エ アメリカ社会では公的な規定を考案する際に「アメリカの黒人」の存在が必ず意識されているように、「アメリカの黒人」なくしては白人のアメリカは存在しえない。
- オ 白人だけでなく「アメリカの黒人」にとつても「白」はキリスト教の神のヴェールと同じく畏敬の対象であつた。

問六 空欄

X

 に入る最も適切な一文を、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア それは独立宣言が奴隷制度に合致するからである
- イ それは奴隷制度が合衆国憲法に合致するからである
- ウ それは合衆国憲法が建国の基本理念に抵触するからである
- エ それは奴隷制度が建国の基本理念に合致するからである
- オ それは奴隷制度が建国の基本理念に抵触するからである

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものには a、合致しないものには b を、それぞれマークしなさい。

ア マーガレット・ミッチェルが作品を発表したことで、当時の「アメリカの黒人」には個々の名前が与えられていないことが白人のアメリカ社会に知られるようになった。

イ 合衆国憲法では当初、「アメリカの黒人」は「奴隷」という表現で示されていなかった。

ウ トニ・モリスンは、アメリカの文学作品を分析する上で人種イデオロギーを無視することはできないと考えている。

エ 二〇世紀の市民運動では、カリスマ指導者の思想のみが主張され、個人の主張を表明することは許されなかった。

オ アメリカの文学作品は「黒」の存在が描かれていなければ、内容にかかわらず作品として成立しえないとトニ・モリスンは指摘する。

Ⅲ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

明治(一八六八―一九一二年)が終わりに近づく三十年代中頃から四十年代、修養を説く書が雨後の筈のごとく現れた。修養ブームの到来である。明治三十八(一九〇五)年頃から「修養」をタイトルに含む書籍が急激に増加し、作家に宗教家、教育者、実業家といったさまざまな者たちが、自分を磨き、高めるための思考や行為について盛んに論じるようになったのだ。

なぜ、その頃から修養がブームになったのか。大きなきっかけの一つは、十七歳のあるエリート学生の自殺である。明治三十六(一九〇三)年五月、旧制第一高等学校(一高)の学生だった藤村操(一八八六―一九〇三)が日光の華厳の滝へ身を投げた。当時、日本にはまだ高等学校が七つしかなく、彼はエリート中のエリートだった。彼が飛び込んだと思われる場所にあった木には、「**巖頭之感**」と題のついた、遺書のような文が刻まれていた。死の真相は明らかでない。

1、エリートとして将来が約束されていた彼の自殺は社会に大きな衝撃を与え、立身出世や社会的成功だけが良いのではないという価値観に目が向けられていくこととなる。職業や金銭ではなく、人生をいかに生きるかを悩む藤村のようなエリートの若者たちは「**煩悶青年**」と呼ばれ、そのような青年層の不満の解決策としても、修養論は積み重ねられていった。

明治三十年代から四十年代は、日清・日露戦争の勝利によって「富国強兵」の国家目標がある程度達成されたことで、社会全体が弛緩する*アノミイ的状况に陥った時期でもある。戦争の勝利は国民に日本という国家へと目を向けさせ、とりわけ日露戦争での勝利は、西洋列強の一つに勝利したという高揚感を人々にもたらした。だが、同時に日本社会は戦争の負担に苦しむこととなり、ロシアから賠償金を得られなかったことに不満を抱え、暴徒化した者たちの手による日比谷焼き打ち事件も起こった。当時二十代だった石川啄木(一八八六―一九一三)は、「時代閉塞の現状」(一九一〇年)という文章のなかで、多くの青年が進むべき方向を見失い、自分の力を持て余していることを嘆いている。そのような社会状況のなか、生きる意味や生き方を模索した青年たちが向かったのが、修養だった。修養は、「時代閉塞」の結果、内訌的(内輪でもめる様子)で、自滅的になり、国家の理想から個人的問題へと関心を移し始めた青年たちによっても求められ、実践されるようになったのである。

2、明治三十年代頃には、新しい国家形成に向けて日本を突き動かしてきた立身出世主義にもかげりが見え始めていた。理想とされてきた立身出世は、中・高等教育機関を経由したものへと限定・整備されていき、明治三十年代半ばには高等学校の入学試験の競争が激化して「受験地獄」の原型が成立、高等学校に進学できない脱落者が多く生まれた。その結果登場したのが、学歴エリートになれないながらも上昇欲求を抱えた「成功青年」である。「煩悶青年」とは異なり、金銭的・学力的問題から学歴による立身出世コースを歩むことのできないノン・エリートの彼らが目

指したのは、富の獲得という成功＝立身出世コースであり、彼らの文化においても修養は盛んに説かれた。明治三十五（一九〇二）年には『成功』のタイトルを掲げた雑誌も刊行され、世の中は成功ブームに沸いた。修養は、それ自体が目的とされると同時に成功するための手段とされ、同誌を契機として修養ブームの大部分は、この成功ブームに流れ込んでいくこととなる。

一方、青年たちの柔弱^{にようじやく}と頹廢^{たいはい}ぶり、享楽や官能への耽溺^{たんじやく}も、しきりに指摘されるようになった。明治三十四、五年頃、与謝野鉄幹（一八七三―一九三五）・晶子（一八七八―一九四二）を中心とした浪漫派の『明星』の詩人たちは、恋愛を星や莖^{せいきん}に託して歌い上げたことから星莖派と称されたが、これを転じて「星莖党」と呼ばれた「柔弱」な青年たちは、「弱行^{じやくこう}の徒」「腐敗墮落の男女」などと揶揄^{やゆ}されたように、「墮落青年」と見なされたのだ。当時、教育学者の今井恒郎は『修養講録』（一九〇四年）のなかで、学生たちの道徳的情操の欠如ぶりと理想の低下は、精神上的の弊害だと憂^{うれ}えている。

こうした新しいタイプの青年たちの背景にあったのが、日露戦争後に巨額の外債を抱え、戦後恐慌の不景気に苦しみ日本社会の行き詰まり感だった。日露戦争と戦争後の財政運営は国民に重い負担を課すこととなり、明治四十一年（一九〇八）年十月には、明治天皇の名前で戊申詔書^{ぼしんしやう}が發布されている。ここには、実業に従事し、勤勉に働いて倏約し、信義を重んじ、華美な振る舞いを避けるようにと書かれていた。この詔書を掲げつつ、翌年からは内務省が、各地方の実務者を集めて町村行政の改善を目指すキャンペーン「地方改良運動」を推進していく。財政の立て直しや納税など、運動が順調に進んだ村は「模範村」として表彰され、宣伝されたが、運動を促進するために内務省が持ち出したのが二宮尊徳の報徳思想だった。そこでは、報徳思想が、自己犠牲や奉公心を要求するものとして運動に適合的な形へと読み替えられ、従来の報徳思想の実践者から批判を受けつつも、国家の政策に用いられていったのだ。

修養は、日露戦争後のこのような時代^Bの精神的潮流の一つとして湧き上がった。それは個人を「家」から切り離し、独立した「人格」として直接に社会のなかへ位置づけるものでもあった。修養は、学歴エリートでありながら人生の意味に悩む煩悶青年や、上昇欲求を抱えた成功青年だけでなく、この時代に課せられた重い負担のなかで農村の改良の担い手たることを求められた農村の青年、そして、「家」が標準とされる社会で周縁的な存在として扱われ、時に蔑視の対象となっていた男性労働者にも、等しく受容される基盤を持っていたという。

このような、煩悶青年、成功青年、墮落青年ほか、明治三十年代半ばに生まれた新しいタイプの青年たちが抱えるさまざまな事情を土壌にして、新しい思想・宗教・社会運動が生じ、出版文化が興^{おこ}った。そして、これらが修養の主な受け皿となったのである。それらの多くは、伝統宗教と関係を持つものや、それらと関係しつつも特定の宗教の枠には収まらない、いわば〈宗教っぽい〉ものだった。現代の自己啓発に〈宗教っぽい〉ものとの繋がりが見られる背景の一つには、明治の終わ

り頃、伝統宗教と非宗教との間にあって、修養的なメッセージを発信したこの種の運動や集団が出現し、社会的に大きな影響を与えたことがある。

近代日本において、^C精神面で主体的に自分を磨き、高めるための思考や実践という意味でいち早く修養を論じ始めたのは、キリスト教系の論者たちだった。明治二十年代のことである。その代表的人物が松村介石（一八五九―一九三九）だ。彼の名は今ではほとんど知られていないが、明治から昭和にかけて日本のキリスト教界の指導的な位置にあった重鎮で、植村正久（一八五八―一九二五）、内村鑑三（一八六一―一九三〇）と並ぶ「三村」の一人に数えられる。明石の士族の家に生まれ、幼い頃から儒教を学んで育った松村は、宣教師のもとで英語の手ほどきも受けた。彼は横浜のヘボン塾に入学後、洗礼を受けて牧師、教育者、記者、演説家として幅広く活動し、四十冊以上におよぶ多くの著作を残している。

松村が積極的に修養を説き始めたのは明治二十六（一八九三）年からとされるが、それ以前の明治二十三（一八九〇）年、彼は『阿^ア伯^バ拉^ラ罕^ハ倫^{リン}古^コ竜^コ伝』を刊行している。同書で彼は、貧しい身分から大成したリンカーンの生き方を記し、リンカーンのような「真人物」や「英雄豪傑」になるための方法を指南する。リンカーンが貧しい出生の境遇を嘆かず大志を抱き、富を求めず、自己の内面を成長させようと励んだことを強調し、「品性ヲ涵^{かん}養」することの重要性を説いたのだ。以降、彼は、多弁で無能な多学者や、すぐに自^う惚^ぬれるような人を目指すのではなく、「真正の修養」を知り、精神面での向上を目指すことの大切さを論じていく。彼によって、『国民之友』などの明治二十年代半ばの雑誌でさまざまに論じられていた青年たちの精神的向上や自己形成は「修養」や「品性」ということばを用いた表現へと改められていった。

『修養録』（一八九九年）は、修養に関する松村の思想の集大成であり、日本初の本格的な修養書とされる。一年後には九版、三年後には十三版を重ねるほど人気を博した。彼は、特に修養に励むべき年齢段階を、「少年」（十四、五歳から二十歳まで）と「青年」（二十歳から二十七、八歳まで）と設定する。「人物の価値は三十歳前後に」概^{おほむ}ね定まっているというのがその理由だった。

同書では、他者からの手助けや儀式的な行為を避けることが要求され、精神的・内面的に成長することの重要性が盛んに強調された。修養においては、「安心の地、処世の道、人生の行路、智術、読書、進歩的人物」が重要であると彼は言い、修養の三段階として、志を立てて学問の道を進むこと（「立志学道」）、さまざまなものが入り乱れ、錯^{さくごう}綜する世のなかでも身をきちんと保ち鍛錬すること（「鍛錬進達」）、俗世界を脱して神明^{しんめい}に通じる境地に達すること（「玄妙自在^{げんみょうざい}」）を挙げ、それぞれの段階における実践の心得を説いている。しかし、いずれも説明が抽象的であり、「玄妙自在」など、一般的に考えて到達不可能な境地である。修養の奥義は到達できた人にしか分からず、修養は、「一は己^{ため}の為にし、二は人の為に」にするものだという。修養した結果、最終的に成し遂げるものが何なのかは曖昧であるものの、自分と他人のために、精神面で主体的に自分を成長させる

ことを目指すのが、彼の説いた修養だった。

松村のいう修養とは精神面での向上を指していたが、その内実はとても曖昧なものだった。何が修養なのか、何ができるようになれば修養が達成できたと言えるのか、具体的な提示がなされない。提示されたとしても、到達不可能なレベルのものであったり、英雄的な歴史上の人物、または自分の役割を堅実に果たした平凡な人物の、青年時代のエピソードが語られるにとどまったりする。しかし修養は、X。修養は、青年の内面的成長を促す概念として曖昧に語られ、だからこそ松村以降、さまざまな立場の者たちが多様な修養法を説き、実践していったのである。

キリスト教徒だった松村が明治二十年代から修養を説き始めた背景には、明治二十三（一八九〇）年に発布された「教育ニ関スル勅語」がある。いわゆる教育勅語^Dだ。彼は、教育勅語のように国家から示された形式的かつ画一的な徳育に疑問を持ち、個人が主体的に精神面を向上させていくべきとの立場から、修養の大切さを説いたのである。上から与えられたものを奉読するだけでは精神面の十分な向上は望めず、自己の向上を目指して自ら能動的に取り組む修養こそが重要だというのが、松村の主張だった。

明治の早い時期から、修養を積極的に論じていったのがキリスト教系の論者であったことは先に述べた。当時の日本においてキリスト教は、文明開化や近代化と切り離せないものと位置づけられ、学術や道徳とも調和できるものだと考えられていた。明治日本において、近代物質文明とヒューマニズムの本質をなしていたものはキリスト教であり、それが近代日本を形作ったことは、河上徹太郎も指摘している（『日本のアウトサイダー』一九五九年）。そのようなキリスト教理解は『西国立志編』を翻訳した中村正直にも見られ、訳者序文のなかで彼は、西洋の強さの理由に人々のキリスト教信仰を挙げている。明治二十年代において、修養ということは政治や道徳と不可分なキリスト教の文脈で用いられ、個人の自立は「富国」とも繋がっていた。明治から昭和にかけて活躍したジャーナリストでキリスト教徒の徳富蘇峰（一八六三―一九五七）も、新しい時代を生きる女性たちの精神面を向上させる方法として、キリスト教の信仰に基づく修養（「宗教的の修養」と「社会的の修養」、「政治的の修養」の三つを掲げている（『国民之友』創刊号、一八八七年）。日本女性が社会進出し、政治参加していくために重要なのは、キリスト教的な自尊自愛の精神を養うことだと言うのである。修養は、近代社会における自立や立身を目指して精神面を向上させようとする意図を含んだことばとして、キリスト教徒を中心に論じられていたのである。

こうした状況を一転させたのが、内村鑑三のいわゆる不敬事件である。教育勅語発布の翌年、明治天皇の書に対して彼が大仰に最敬礼しなかったとされる出来事である（敬礼はした）。事件に対し、帝国大学（現東京大学）教授の井上哲次郎（一八五六―一九四四）は、キリスト教は教育勅語の説く忠孝に大きく相違すると批判した。かねてより内村のことを快く思っていなかった一部の教師や学生も騒ぎ出し、非難を浴びて体調を崩した内村は教職を辞さざるを得なくなった。これ以降、

キリスト教は学校教育から排除されるべきものと見なされるようになっていく。

キリスト教徒たちは、自分たちの信仰するキリスト教が近代日本社会にとつていかに有用であるかを説明し、それが新時代にふさわしいものであることを積極的に示す必要に迫られた。幕末に活躍した儒学者・横井小楠の長男でジャーナリスト兼牧師、のちに同志社第三代社長となった横井時雄（一八五七―一九二七）は、内村を擁護し、日本の道徳にとつてキリスト教信仰がいかに必要であるかを強く訴えた一人だ。彼は、キリスト教は教育勅語が説くような忠孝に反するものではなく、教会は「新日本の社会に道徳を修養すべき社交」の場であると、キリスト教の役割の重要性を強調している。彼は、「忠君愛国」を掲げる修身のような形式的な教育を「余りに狭隘」だと批判。趣味や品行を高尙にするために「人間の心を養ふ」倫理的修養の必要性を訴え、学生に宗教を自由に学ばせたり、新しい時代の文化にふさわしい音楽教育の重要性を主張したりした。彼はまた明治三十（一八九七）年に宗教学者の姉崎正治（一八七三―一九四九）、岸本能武太（一八六六―一九二八）、哲学者の大西祝（一八六四―一九〇〇）ら若き知識人とともに、新しい道徳の確立と普及を目指す丁酉懇話会（丁酉倫理会）を結成している。各宗教の教義や教団組織の垣根を越えて宗教者が連携することを目的とした同会では、人格や精神の向上に役立つさまざまな要素を取り入れながら、新しい修養のあり方が打ち出されていった。

（大澤 絢子 『「修養」の日本近代―自分磨きの150年をたどる』 一部改変）

* アノミ¹的状況…社会的規範が弛緩または崩壊したことによる混沌とした状況。

問一 空欄 1 ・ 2 に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|-----------|---------|
| 1 ア このように | 2 ア ただし |
| イ さらに | イ だから |
| ウ さて | ウ しかし |
| エ だが | エ または |
| オ まだ | オ さらに |

問一 傍線部 A「修養ブーム」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 当時の作家、宗教家、教育者、実業家などは、出世のために自分を磨き、高める修養ブームを批判していた。
- イ 受験地獄のなかで高等学校に進学できない脱落者たちは、修養ブームにも生きる意味や生き方を見出せなかった。
- ウ 富の獲得という成功＝立身出世コースを目指した成功青年たちは、修養ブームの中心的な位置にあった。
- エ 恋愛を星や堇に託して歌い上げた浪漫派の『明星』の詩人たちは、修養ブームについて批判的な立場だった。
- オ 「弱行の徒」「腐敗墮落の男女」などと揶揄された腐敗青年たちは、修養ブームの中で生活改善を強いられた。

問二 傍線部 B「精神的潮流の一つ」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 修養は、戦後恐慌の不景気に苦しみ日本社会の行き詰まり感を打破するために政府が模範村を選定する際に重視した精神的潮流の一つである。
- イ 修養は、日露戦争後の行き詰まり感のなか、政府が戊申詔書に基づいて地方改良運動を進め、報徳思想を政策的に用いた時代の精神的潮流の一つである。
- ウ 修養は、二宮尊徳の報徳思想を地方改良運動に適合するような形へと読み替え、自己犠牲や奉公心を特に重視する中で見出された精神的潮流の一つである。
- エ 修養は、日露戦争の戦勝に高揚する社会状況のなかで、政府が掲げる報徳思想に賛同する多くの国民が推進した地方改良運動の精神的潮流の一つである。
- オ 修養は、道徳的情操が欠如し理想が低下している学生たちを立ち直らせるために、当時の教育者が戊申詔書に基づき推進した精神的潮流の一つである。

問四 傍線部C「精神面で主体的に自分を磨き、高めるための思考や実践」とあるが、修養を論じた松村介石の主張として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア リンカーンにならない、修養により貧しい身分からの大成を目指すべきである。
- イ 青年の精神的向上や自己形成は「修養」という語を用いた表現で示すべきである。
- ウ 人物の価値は三十歳前後に概ね定まるので、高齢での修養は避けるべきである。
- エ 修養には三段階があり、すべての人が玄妙自在の最終段階を達成すべきである。
- オ 品性を涵養し、真正の修養を知って、精神面での向上を目指すべきである。

問五 空欄

X

 に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 多様な修養法を受容するために曖昧にすべきものだった
- イ 到達不可能なレベルのものであるために曖昧さが求められた
- ウ その曖昧さゆえに自在に語ることが可能となった
- エ 人物のエピソードに基づくゆえに曖昧さをともなった
- オ 偉人と平凡な人物の双方に適用しうる曖昧なものであるべきだった

問六 傍線部D「教育勅語」とあるが、教育勅語と修養の関係について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

- ア 明治政府は、自己の向上を目指して自ら能動的に取り組む修養を、教育勅語の奉読という取組により全国的に推進した。
- イ 教育勅語により、近代物質文明とヒューマニズムの本質としての、キリスト教的な修養の重要性を示す内容が、学校教育に盛り込まれた。
- ウ 教育勅語をめぐる不敬事件の結果、「人間の心を養ふ」倫理的修養の必要性を説き、キリスト教を擁護する人物も現れた。
- エ 政府は教育勅語というかたちで形式的かつ画一的な徳育を示したが、松村介石は個人が主体的に精神面を向上させる修養を説いた。
- オ 徳富蘇峰は、日本女性の社会進出には、教育勅語の奉読とともに、キリスト教的な自尊自愛の精神の修養が必要だと主張した。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものには a、合致しないものには b を、それぞれマークしなさい。

ア 石川啄木は「時代閉塞の現状」において、明治時代後半の三十年代中頃から四十年代に到来した修養ブームの方向性のなさを嘆いた。

イ 旧制第一高等学校の学生で当時のエリートの人であった藤村操は、修養の重要性を論じた『巖頭之感』を明治時代半ばに出版した。

ウ 明治時代に公布された戊申詔書は、国民に対して、実業に従事し、勤勉に働いて儉約し、信義を重んじ、華美な振る舞いを避けるよう示した。

エ 内村鑑三による修養批判をめぐって引き起こされた一連の事件により、明治時代後半の公教育からキリスト教的な考え方が徐々に排除された。

オ 明治末期のキリスト教徒たちは、キリスト教が近代日本社会にとって有用であることを示すために、新しい修養のあり方を模索した。